

「尾根と谷(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

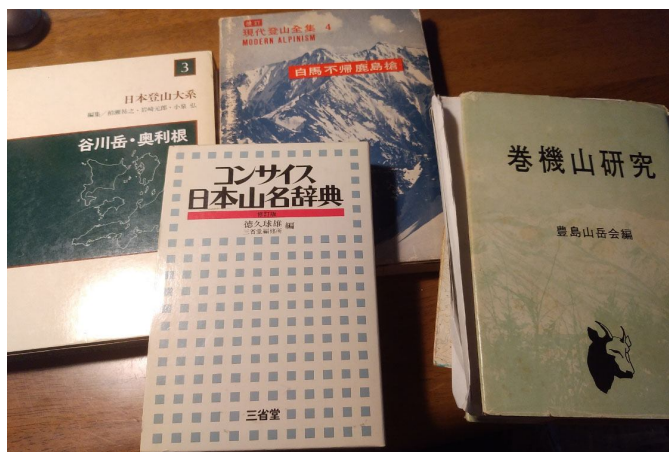
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

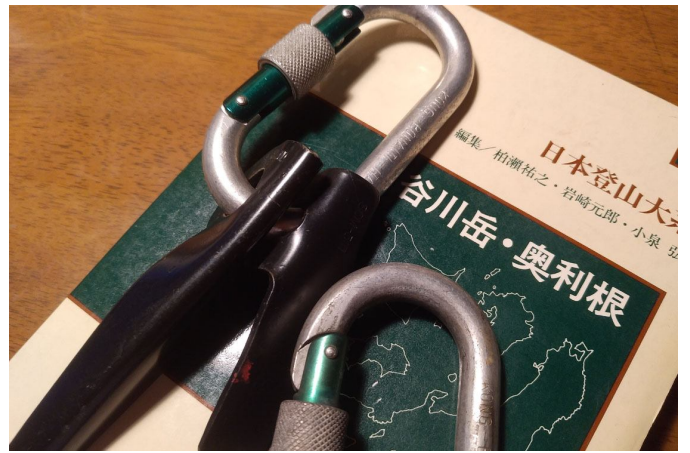
私はかつて山岳部に入っていた。小学生の頃から父が登山に連れていってくれて、それ以来「山づいて」しまったのだ。



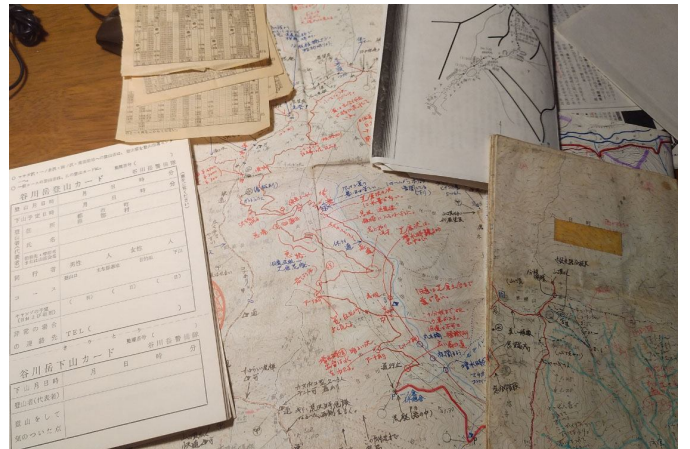
写真は小学校6年の時に行った「白馬岳山行」の写真。白馬大雪渓での集合写真だ。父は私だけでなく、クラスの友達大勢を連れて、あちこちの山に連れていってくれた。父がリーダーだったが、ほかの友達の父親も加わってくれた。今思えば、すごいイベントだった。高尾山から始まり、奥多摩、奥秩父、中央アルプス、北アルプス、南アルプスと難度を高めていった。



就職してからは、もっぱら「単独行主義」で、主に上越国境を歩いていた。「上越国境」というのは、群馬県と新潟県の県境の利根川源流の谷川連嶺のことである。本棚を整理していたら、谷川山系を中心とした登山書がたくさん出てきた。ざっと20冊。久々に何冊か手にとって開いてみた。



カラビナやピトン(岩釘)などの山の道具も、久しぶりに手にした。どれもこれも懐かしい。



本には、さまざまなものが挟んであった。赤ボールペンでぎっしりと情報が書き込まれている「1:25000地形図」、「時刻表の端切れ」、山岳警備隊に提出する「登山届用紙」、谷沿いに尾根を目指す「遡行図」、それにさまざまな「メモ」などだ。当時の鉄道の切符も挟んであった。これもまた、すべてが懐かしい。



地形図には、実際に踏査した時の情報が、ぎっしりと書き込まれている。インターネットのなかった時代、数少ない登山案内書だけではわからない、現地で見つめた情報を書き込むのは、山岳部時代からの癖だったのだ。